濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

—— 資料紹介『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』-

中前正志

昭和二年西国札所総出開帳(1)

館 ないものである。 現在も谷汲図書館に所蔵されている(文書番号「五・三・一二」)。今のところ、 世音聯合開扉記念おみやげ』があった。谷汲村文化歴史資料調査保存事業目録作成委員会編『巡礼の里まるごと資料 に関わる文化歴史資料の調査保存事業が実施されたことがある。その際、対象となった資料の中に、『西国三十三所観 美濃の谷汲山華厳寺は、 谷汲村文化歷史資料目録』(谷汲村発行、平16) 揖斐川町立谷汲図書館は所在している。そんな同図書館を「巡礼の里まるごと資料館」と称しつつ、旧谷汲村 西国三十三所観音巡礼の第三十三番札所すなわち満願道場として知られるが、そのすぐ近 の三十九頁に同資料の概要が掲載されていて、 同図書館以外での所蔵を確認し得てい 同資料そのものは

A 3版の一枚刷計三十三枚が袋に入れられていて、 その袋の表 (右目録に写真掲載、 後掲図1参照) の中央に大き

であって、 枚ずつ加わって計三十三枚となっている。 三十三枚であるのと合致しており、欠損のないことが確認される。 札所の観音を一斉に寺外で開帳する西国札所総出開帳が開催された、 三十七回忌の供養として、 谷汲山華厳寺の場合だけは、 総出開帳」 て/昭和 「西国三十三所観世音 第四番施福寺と第二十五番播磨清水寺の分が見当たらず、 また「(各奉安所にて発売)」とも見える。明治二十四年 厳密には ではないということになろうが。 二年四月十五日"』同年五月廿日マデ」、左に「〈濃尾大震災横死者/三十七回忌大供養〉 「総出開帳」 /聯合開扉記念おみやげ」と掲げられ、 昭和二年(一九二七)、大垣市とその周辺を会場(奉安所)に、西国三十三所観音巡礼の各 右引記事に「……谷汲において」とあるから居開帳であったらしいので、 でない面もあることになる。 第四番と第二十五番はそもそも出開帳に加わらなかったものと見られるの また、 袋の表には その右に 一方、 (一八九一) に発生した濃尾地震における横死 「卅三枚壹組 しかし、各札所につき一枚ずつ宛てられているな 番外の花山院と勝尾寺善信堂見真大師の分が その際の「記念おみやげ」だと知れる。 「大垣市 ^{価定} ○養老、 銭」ともあって、 高田、 赤坂 大垣奉賛会」とあ 中 身の一 厳密に言えば 谷汲にお 枚刷が 者 \mathcal{O}

評するの外なし: べき勢ひを現せり」、「大垣町の被害」について「一震の下、万骨枯る濃州安八郡大垣町の惨状は実に此 平成十四年にブックシ な追弔法会が開かれたし 濃尾震誌』 濃尾地震は、 雷の頭上に堕落せしと思ふ間もなく劇烈なる震動を起し瓦飛び屋倒れ地裂け井溢れ瞬時にして全世界にの頭上に堕落せしと思ふ間もなく劇烈なる震動を起し瓦飛び屋倒れ地裂け井溢れ瞬時にして全世界に (勝沼武一発行)は、 芥川龍之介『疑惑』が罹災当時の大垣を舞台としてもいる地震。 ョップ 又惨酷又酷当時の状況は到底筆端の写し得べきにあらざるなり」と記す。 (中央防災会議編『一八九一 「マイタウン」より復刻されてもいる、 明治二十四年十月二十八日午前六時三十分過ぎの発生時点の状況について 濃尾地震報告書』16~16頁、平18)、平成三年には大垣市にて、 明治二十六年三月二十五日発行 濃尾地震関係書として評価 発生 の片 0)翌月 Щ 語を以て も滅絶す 「轟然」 逸郎編述 カ が 高

声が

追悼供養など濃尾震災百年記念事業が催されている (『濃尾震災100年記念誌』 大垣· 市、 平3)。

者三十七回忌供養/ 聯合開扉記念おみやげ』の中身三十三枚のうち二十八枚に、「讃歎し奉る大悲妙智力」と題し、 て(図2参照)、そこに反映してもいる。 この濃尾地震における犠牲者の三十七回忌供養としての、 〈西国卅三所/霊場観世音〉 聯合開扉大垣奉賛会」と記す、 右西国札所総出開帳の開催趣旨は、『西国三十三所 次の通りの全くの同文が掲載され 末尾に 「濃尾震災横死 世音

焼く能はず、水も漂はす能はず、 関東震災の如く、但馬丹後の震災の如くである。……我大垣が今より三十七年前、 白骨と化し、出づる息は入る息を俟たず、大地一たび震へば幾万の生霊忽ち火埃中に没すること、濃尾震災の如く、 に頂礼すべきにあらずや。 あることを得たのは、 『色は匂へと散りぬるを我世たれそ常ならむ』真に無常の世の中、無常の人生。朝たに紅顔を誇りし者も、 一旦全く破滅の悲運に陥ゐりたりしも、 関東大震災の際、 嗟呼この活仏は慈眼を以て衆生を視られ、 浅草観音堂の一地域のみが無事なるを得たると好一対である。 彼の観音の力を念じたる、 眼前利益に依り、 福聚の海無量なり。 即ち明治廿四年の大震災に襲 遭難以前に優る今日 吾等は諸君と共 実に火も

昭和二年西国札所総出開帳(2)

ので、 その資料の左下には 岐阜県図書館には、 前項に取り上げた『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』と一連のものであるに違いない。こちらの 図3参照)。縦三九・二m×横五四・七m、 「〈濃尾大震災横死者三十七回忌供養/西国卅三札所観世音本尊聯合開扉〉 上端部に 「南無大慈大悲観世音菩薩 赤と青の二色刷で、 (本尊聯合開扉)」と横書きした一枚刷資料が所蔵されている (26-同図書館によってデジタル公開されてもいる。 大垣奉賛会」と見える

枚刷資料の方は、 昭和二年西国札所総出開帳における各札所本尊の奉安場所を示した案内地図である。

あと、 と記載されていることと、 社南」、そして「大垣市が、この花山院をもつて大震災総供養場にあてたといふことは、まことにゆえあることである」 合開扉記念おみやげ』三十三枚の中に番外の花山院の分一枚が含まれていること、それに と記載されていて、それが同地図のほぼ中央に位置している。そのことは、 花山法皇 と、地区ごとに分けて呈示・案内されている。第三区の中に、「震災横死者総供養道場 『同』三十三枚のうちに、これも先述通り勝尾寺善信堂見真大師の分が一枚加わっていることと符合している。 図の上方には、 各札所本尊の奉安場所やアクセス、 (摂津)」と見え、 「参詣者便覧」 照応するものに違いない。「総供養場 地図においても、 が掲げられ、「道案内料金」や「車賃」「自動車賃」「支度料」「宿泊料」が示された 順路が、 大垣城のある公園の脇、 大垣市内第一区西部 花山院」と並んで地図に記される「見真大師」 「招コン社前」 ・同第二区東部・同第三区中央部 前項に見た通り、 の近くに「総供養場 公園南/奉安本尊 「奉安所 『西国三十三所観世 大垣市郭 札所開 花山 町 音聯 招 院

が記載されておらず、 まれておらず、それらは総出開帳に加わらなかったものと見られると、 の案内地図にも、 『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』三十三枚の中に第四番施福寺と第二十五番播磨清水寺の分が含 前項において谷汲山華厳寺の場合は出開帳でなく居開帳であったらしいと述べたが、 「イビグン谷汲村」に「卅三バン谷汲山」が載せられており、 その点も間違いなく確認し得る。 前項に述べたが、右一枚刷案内地図にそれ 間違いなく居開帳であったことが 確かに、 右一枚刷 確認 資料

掲載しているが、 長谷寺も見られ 枚刷案内地図をさらに検するに、 ない。 それら三札所については、 『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』 第四番札所と第二十五番札所以外に、第二番紀三井寺・第三番粉河寺・ 「所在地」「本尊」のみで「奉安所」が記載されていないので、 は、 各札所ごとに 「所在地」「奉安所」「本尊 やはり総 第 八番

引通り 出開帳 置されていたことが知れる。 まれていて、 それら五札所のうち、 単なる記載漏れだろうか。 四番、 に加わらなかったようである。 「震災横死者総供養道場 第四・二十五番の分は入っていないが、 八番の遙拝所あり納経附与」と記されているので、 第二・三・八番札所の分各一枚はそれぞれ『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』に含 ただ、 公園南/奉安本尊 その記事の中に「二十五番」 結局、 計五札所が出開帳しておらず、 札所開山花山法皇 その違いはわからない。また、 が含まれていない事情についてはやはり、 出開帳しなかった札所の遙拝所が、 (摂津)」と見えるが、それに続いて「二番、 かなり不完全な総出開帳になってい 枚刷案内地図の上方には、 総供養道場に設 わからな る。

氏邸)」と案内されてもいる。 なお、 枚刷案内地図の左上に「醍醐寺宝物 札所本尊の出開帳に止まらず、そうしたものも同時に開催されていたことが窺える。 /国宝展覧会/自四月廿日 至五月五日 /会場 大垣公園西 (日下部

明治二十六年西国札所総出開帳

濃尾地震に関わっての西国札所総出開帳は、 より早く、 地震の一年半後にも開催されていた。

時ニ、 ヒ起ス往年濃尾ニ於ケル大震災ノ当時タル余ハ実ニ其中心点ナル大垣ニ住シ以テ之レヲ実地ニ目撃セリ否是レヲ余ガ 余自身ト其血縁トノ上ニ受ケ非常ノ困難ニ陥リ其極十有一名ノ有縁ヲ亡失セシメタリ」と書き始めたうえで、 一十六年(一八九三)三月二十七日に出版されている。 『西国縁起集』 其レガ遺族者ノ転過享福ヲ全フセシメント欲スルニ際シ」と記しているが、『鹽縁起集』 の発行者でもある。 は、 奥付によるに、 その勝沼は、『濃尾震誌』 岐阜県安八郡大垣町伝馬十五番戸在住の勝沼武一 0) 勝沼武一は、 「叙」でも「今ヤ其レガ死亡者追善冥福ノ法会ヲ修スル 先に一部引用した同年同月二十五日発行 が編集・ 発行 「自叙」では したもので、 明治 1 同 濃

這回大慈ノ尊像ヲ開 扉シ其レガ死者ノ冥福ヲ祈リ併セテ遺族ノ転過享福ノ資ニ供セント欲スルモノ蓋シ又是レガ

為メ而已

た、「叡山沙門 と末尾部に述べている。 蘆津實全」による「序」の中には、そのことについてより詳細かつ明瞭に、 観音像の開扉に言及する(傍線部)点、注意される。さらに、その 「自叙」 の前に据えられ

経営其賛画已に成るを以て本年四月同地に開扉の盛典を挙げ道俗士女をして普く菩薩に結縁せしめんとすと云ふ るなり…… を挙て大垣に参詣せば数箇国巡拝と其功を斉ふして其大悲降臨中ハ大垣は即ち西国の霊場を縮少するの浄土と成 及び回来の賽詣者をして大慈眼を以て一子同仁の利益を施し玉はんとの嘉運に遭遇したれば遠近を論ぜず諸 ……今や菩薩ハ大垣に降臨して三十三日間特に此土の衆生の嘗て苦に罹りて死傷し又生存するも衆縛に纏はる者 所の観世音菩薩を拝請して大垣に勧請し死亡者の霊魂を弔慰し生存者の福楽を種植せしめんとして昨秋以来拮据 て害を受ること甚しく……大垣は最も劇苦を嘗めたりき……這回該地の信徒勝沼信之等胥議して西国三十三番札 ……爰に明治二十四年十月二十八日天明地大に震動して人民非常の災害に遭ふ就中美濃尾張の二国 ハ其中心にし

と記述されている(傍線部)。

大人」と見えるから、 主/勝沼信之誌」と署され たものと見られる。右引「序」に「該地の信徒勝沼信之等胥議して」(破線部)とあるが、「自叙」の末尾に 復興を祈念して、『鹽縁起集』の編集・発行者の勝沼武一(信之)らにより、西国三十三所観音の総出開帳が開催され これらによるに、明治二十六年四月の某日より三十三日間、やはり大垣において、濃尾地震の被害者の冥福を祈り 勝沼を中心に慈眼会が主催者となって開催したものであろうか。 (『濃尾震誌』 0 叙 の末尾も同じ)、村上玉橘による「跋」に 「慈眼会のあろじ勝沼の 「慈眼会

養法会を催していたことも確認し得る。

僧侶を招請 垣町聯合開扉に付き慈眼会は目下震災死亡者乃ため大供養を営み居れるが去三日の如きは十数人の楽人と数十名のがきまちれんがふかいひ つ じ ぐわんくわい もく かしんさいし ばうしゃ だいく やう いとな を たという、 第三十三番の谷汲山華厳寺も大垣にて出開帳したようである。その後、 開帳をなす谷汲山観世音へ大幟一対吹貫一本を寄附したるよし」と記すから、かいてう たにぐみざんくわん ぜおん おほのぼり つるふきぬき ほん きょ が掲載されてもいる。 宿 間 ハ大旗及び幟を押立て一昨三十日より余程景気を添へたりし」と報じられており、 垣 護僧方の読経の間、 月九日号には に全線開通して同寺に行きやすくなったこともあって、昭和二年時には出開帳でなく居開帳となったようである。 ハ右様不徳義不名誉ノ事ハ決シテ不仕一銭ノ直上不仕候間悪評ニ御懸念ナク何卒御投宿ノ程奉願上候」という「広告」 町の 明 三軒による、「今般当地観音ノ開帳ニ付俄ニ宿料ヲ暴騰シ過当ノ代金ヲ貪取云々ノ風聞モ有之趣ナレ共私共ニ於テ と記したが、 治二十六年の 賑ひ 」と題して、「安八郡大垣町にては愈々今一日より西国三十三所観 霊験譚を掲載してもいる。 .開帳の盛況ぶりを伝えている。 盛なる法会を修し漸く黄昏に及んで式全く了りたり……」 「家鶏仏徳に感ず」と題して、華厳寺本尊が出開帳に向けて大垣へと運ばれる途中のこと、白鶏 正確には四月一日~五月三日を会期としていたことが判明する。また、同号には、「美濃大垣 『岐阜日日新聞』 「駢びて頭を低れ眼を閉ぢ一心不乱に大慈大悲の観音擁護の結縁に感ずるものゝ如く」であっなら、からで、たいまな」と、これよいでいて、それもおんなうご、けらえん、かん あるいは、 同号が「信者の寄附」と題して「羽栗郡笠松町の信仰連は今度安八郡大垣町へ出はぐりごほりかさまつまち しんかうれん こん ど あん ごほりおほがきまち で を検するに、 そして、四月十三日号の「大垣 なお、 右の総出開帳に関する記事が多く見出される。 四月八日号には「慈眼会の震災供養」と題する記事が見られ、 「開扉の景況」 桑名——大垣 と :世音聯合開扉を執行するに付き各所に、ぜ おんれんがふかい ひ しつかう 総出開帳に合わせて先述の慈眼会が供 先の昭和二年総出開帳の時と違って、 や四月十四日号の「大垣町 右には 揖斐を結ぶ養老鉄道が大正 「四月の某日より三十三日 兀 月 一 日号には、「大 一町旅人 四 羽が 四

新出の西国札所総出開帳と四国霊場総出開帳

例えば、佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』(人文書院、平18) に、

音霊場三十三ヶ所阪急沿線出開帳」 年に近畿地方を見舞った風水害の犠牲者の追悼慰霊大供養塔建立と、「皇国非常時打開」の二つであった。 秩父札所は全寺院がそろっての総開帳が恒例になっているが、 京浜沿線と東横沿線で行われた。その目的は「非常時護国祈願震災十三年供養」であった。 国札所の今一つの総出開帳は、 帳も稀で二回行われたのみである。その一つは、昭和十年三月十日から四月十一日までの三十三日間に亘って、「観 同じ昭和十年の十月十日から十一月十一日までの三十三日間に亘って関東地 が 「西国三十三ヶ札所連合会」の主催で開催された。 西国札所では総居開帳は行われなかった。 出開帳 \mathcal{O} Ħ 総出開 的 方の は前 귪

資料目録』に概要が記載されている)。 頭に述べたように、『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』自体は『巡礼の里まるごと資料館 までに見てきた、 のうえで注目すべき事例と言っていいだろう。 (一九二七) 時の二回に及ぶものであって(昭和二年時のものは、先述通り厳密には総出開帳ではないが)、巡礼研究 沿線と京浜沿線・東横沿線における昭和十年(一九三五)時の二回だけであるらしい(傍線部など)。 と記される(72~73頁)。これによるに、 濃尾地震に関する総出開帳は、ここに新たに確認できた新出のものということになる(ただし、 しかも、 西国札所総出開帳として、巡礼研究において従来把握されているのは、 右の昭和十年時よりも遡る、 明治二十六年(一八九三) 谷汲村文化歷史 すなわち、 時と昭和 前項 阪急

ある、 四国八十八ケ所霊場 森正人『四国遍路の近現代 昭和十二年 (一九三七) の大阪南海沿線での四国霊場総出開帳について、 甾 開帳」 は、 - 「モダン遍路」 四国八十八所霊場の総出開帳として唯 から「癒しの旅」まで― 開催された、 -』(創元社、 右の昭和十年時の二回のうち阪急沿 平17) 第二章 まさに 「空前絶後 『空前絶後!』 0) 事例

国三十三ヶ所の出開扉は、 線での 「西国巡礼出 開扉の成功が、 後の四国八十八ヶ所出開帳のモデルとなっているようである」と記し(67頁)、佐藤先掲書 四国八十八ヶ所の 出開帳 の開催に際して、 関係者たちに大きな自信を与えた。 西

四 に西国札所が阪急沿線と関東で行った二回の出開帳が強く影響を与えたとも考えられる。 [国霊場の総開帳は八十八カ所の総意が難しく、不調であったが、 昭和十二年の南海沿線での出開帳は昭 和 十年

面があるのでは と説く(4頁)。「空前絶後」たる昭和十二年の と考えられているのである。 四国霊場総出開帳が、 昭和十年の西国札所総出開帳によって導 かれ た

て取り上げている。 たという一 また、右の森著書も佐藤著書も、 件を、吉田卯之吉編 同書には、 『四国八十八ヶ所霊場出開帳誌』 四国霊場が実は、 昭和四年に大垣で総出開帳しようとして完全には実現 (四国八十八ヶ所霊場出開帳奉賛会、 昭 13) に基づい えしなか 0

開 たのは、 八十八箇寺院が揃 几 なつたが、 はないのである。 帳すべ 国霊場の 昭和四年岐阜県大垣市に於て行はれた四国霊場出開帳であつた。当時伊予部会は霊場神聖保持の為め からず」と強硬に主張し、 其の出開帳も中途に於て、不幸閉鎖の止むなきに至つたと伝へられてゐる。 出開 帳 過去に於て数回、 つて出開帳しようと意見の一致を見たことさへもなかつたらしい。 は空前の事と云つてゐるが、 十数回試みられたけれども、 知事の勧誘をも退け、 然らば之が出開帳計画は皆無であつたかと言へば、 他三国の強要にも屈せず、 何れも無事遂行するに至らなかつたのであつた。 殊に最も不幸な状態になっ 遂に六十二箇寺の 決してさうで 出 開 帳と

で森著書も佐藤著書も何ら言及していないが、先述通り、 と見える (2~3頁)。 ここにも特に触れるところがない Ļ この大垣での四国霊場総出開帳の二年前の昭和 巡礼研究において従来把握され てい ない もの 二年に、 0 ようなの 同

所総出 史文化博物館 新たに昭和二年時大垣での西国札所総出開帳が見出されたことによって、そんなことも憶測されることになるだろう。 単に二年前 じ大垣の地にて西国札所の総出開帳が行われていたのである。「空前絶後」の昭和十二年における四国霊場総出 沿線・東横沿線でのものについての なお 一年のものと解説している)。後者は、先に取り上げた昭和二年時の一枚刷案内地図と同様のものである。 開 昭和· 帳の後を追って大垣にて開催しようとした、 0 西国札所総出開帳の影響下に実現したというに止まらず、 編 十年の西国札所総出開帳のうち、阪急沿線でのものの広告の写真が森著書や佐藤著書に掲載され、 四四四 国 |遍路と巡礼| (平成二十七年度特別展図録) 「観音霊場西国三十三札所京浜東横沿線出開扉案内図」の写真と解説が愛媛県 同様の経験が生かされた結果という面もあったのではない に載る 八年前の昭和四年に、 (ただし、 同案内図を昭和十年でなく昭 やはり二年前の西国札 開 帳 京浜 は、 和 歴

総出開帳と略縁起集

館 に基づいていて、 例えば、 亘って載せられていることになるが、それは基本的には、 を裏に、 記事を載せる本文計七十頁を中心としつつ、各札所の本尊御影と巡礼歌を表に、 せて刊行されたものに違いあるまい。 自叙」 令 3 > それぞれ掲載した、石版による計三十三葉を、 第十番札所三室戸寺条に掲載される縁起記事の場合、 Þ 300~301頁参照)。 序 が明治二十六年の総出開帳に言及していた、 箇所を除いてほぼ同文になってい ただし、 第二十二番総持寺条に掲載される縁起記事は その本体部は、 冒頭に る 随所に挿入している。縁起記事は札所ごとに平均約二頁分に (拙著 各寺院発行の略縁起に拠っているのではない 「題音縁起集) 『寺院内外伝承差の原理 同寺に版木が所蔵されるおよそ江戸後期の 同総出開帳直前の /慈眼会編纂」と掲げたうえで各札所の縁起 当該札所寺院の境内や伽藍の 『翻音縁起集』 上の 縁起通史の試みから』〈法藏 如く旧記 は、 同総出開 かと思われる。 の要を撮し其 『畧縁起』 帳に合わ 「真景」

概は を摘み以てこれを略縁起とす」と結ぶから、 新たに編纂された部分もあるだろうが

には、 部については別に、「奉安所 高 を挙げさせらるゝにあたり、 に、やはり縁起記事が載せられている(図2参照)。うち二十八枚には、 三十三枚いずれ に掲載されてい 田 『西国縁起集』 .町において尊像を拝し得るといふことは、まことにおそれ多くもあり難き事どもである」を加えてもいる 和二年時の総出開帳の際に頒布されたものである、 明治二十六年時の総出開帳を受け継ごうとする面があったことを窺わせようか。 れにも、 る。 所載記事に基づいて記述したあと、末尾に、それにはない記述「明年は畏くも今上陛下御即: その縁起記事は、 袋の表に「うつくしい御絵どき」と記される 恒例により山城国宇治の御本堂において開扉せらるゝのであるが、それに先立ち、 岐阜県養老郡高田町」と記載してある)。 右の 『顧音縁起集』に拠っている場合が多いようである。 先の『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』 (図1参照) 先述の記事 通り彩色された絵が画 「讃歎し奉る大悲妙智力」と一緒 ただし、 昭和二年時の総出 例えば三室戸 かれるととも 寺 (傍線 所収 今回 大典 開 0 場

出開帳であるのだから当然のこと、両者いずれも、 通りである。 掲拙著27頁) ように、 をわざわざ末尾部に載せており、いずれかの天皇の即位時の開帳に伴うものであったかと臆測されるところである 延長線上にあって、 例えば、 先に触れた、三室戸寺に版木が所蔵される江戸後期の『畧縁起』 右の『鱈縁起集』や『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』は、そうした開帳時版行略縁起の それらを引き継ぐ面を持っているのだと言えよう。そして、 西国札所寺院でも近世以降、 札所寺院の略縁起を集成した略縁起集となっているのである。 開帳に合わせてしばしば略縁起が版行されてきたこと、 ŧ, 新帝即位ごとの 各札所寺院単独 開 帳に 0 出 つい 開 帳でなく総 知られ 7 0 数々 記述 る

章を加えている。そして、

その中に、

「過ぎし延宝の頃なりとか美濃国大垣に老若男女多く巡礼を思ひ立て出けるに「過ぎし延宝の頃なりとか美濃国大垣に老若男女多く巡礼を思ひ立て出けるに

「附録」として、

「巡礼権輿及び中

-興或問」

と題する文

なお、

『鹽縁起集』は、三十三所の各縁起を掲載したあとに

0

写真が載せられている(図2参照)。 れない。 の庶民化と世俗化し ものである(中前編『東山中世文学論纂』 (一七二六) 『西国三十三所観音霊場記』、 人の童女あり……」と始まる、 あるいはそのうちの二十八枚に見られる記事「讃歎し奉る大悲妙智力」以外、各札所寺院の本堂などと奉安所の 居開帳であった第三十三番谷汲山華厳寺の分については当然、奉安所の写真は載せられていない。 また、『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』所収の三十三枚には、 参照)。 それは、 大垣を舞台とした西国巡礼霊験譚が載せられてい ただし、 大垣地域において特別な意識をもって享受されてきた霊験譚であったかもし 弘化二年(一八四五)『西国三十三所観音霊場記図会』の各末尾に見られる 〈平26私家版〉 出開帳に加わらなかった第二・三・八番の分にはそれらの 収載拙稿 「覚書 西国巡礼霊験譚としての尸解譚 縁起記事とそれを る。 もともと、 「絵どき」した 写真が掲載さ 享保十一年 戸解

明治二十六年一枚刷『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』

西国三十三番及御詠歌観音霊験記」 稿者の手許に、 縦三九・六㎝ が掲げられ、 × 横 五四 左下に奥付が \bigcirc cm \mathcal{O} 枚刷資料がある 図 4参照)。 上端の枠外に大きく、 標題

明治二十六年三月廿三日印刷

明治二十六年三月廿三日出版

版権所有 著者発行人及び印刷人 大月勤二

大垣町一/手大販売 大野萬次郎

ている。 と見られる。 一区画毎に 全体が、 「西国三十三番」札所一つが宛てられ、 縦四段×横九列に格子状に分割されていて、 各区画の右上に本尊観音の図像、 結果、 基本的に計 三十六の縦長 その下に札所の寺院名 \mathcal{O} 区 一画で構 成され

観音

ら四 あって、 四 霊験記』 焼之図」「枇杷島破損之図」「名古屋郵便局破壊図」と題されるものである。この一 事などではなくて、札所とは無関係の四面の絵を掲載する 一十七日に、 月 一 計三十六区画のうち三十三区画が右の形で整然と埋められていて、 面 日より三十三日間、 の絵は明 右の一 は右奥付の通り、 総出開帳に伴う略縁起集と言うべき先述の『縁起集』が刊行された、その四日前の刊行である。 枚刷 治二十四年の濃尾地震における被害を画いたものに違いあるまい。 は、 その直前に同総出開帳に合わせて刊行されたものに他ならないだろう。 明治二十六年三月二十三日に刊行され大垣で販売されていたものであるらしいので、 大垣において、 濃尾地震の被害者の冥福と復興を祈る西国札所総出開帳が開催されたので (図6参照)。「大垣町地震大火之図」 残る左下の三区画分には、 そして、 枚刷 『西国三十三番及御詠 先述通り、 「岐阜市街」稲 各札所につい 明治二十六年三月 明治二十六年 ての 歌 観音 Ш 記

すものであるとも言えよう。 霊験譚集だということになる。 機関にも同 及御詠歌観音霊験記』 ようになっている場合も見られる。 佐藤先掲書に付される詳細な書目 の部分など、至って粗雑なもので、誤字脱字の類や文章表現の整わない点が多々存するし 「西国三十三番御詠歌及観音霊験記」であるのを誤ったものか)、区画の中に書き切れずに末尾部が尻切 |資料が 所蔵されてい は著録されていない。さらに、谷汲図書館にも国立国会図書館にも他の種々図書館あるい あるいは、 一定の意味を有するものと認められよう。ただ、後に具体的に触れるように、 るのを知らない。それは、新たに見出された総出開帳に伴う、 「西国巡礼に関する書目」には、『鱈縁起集』 しかし、 現に、 それこそが、 今のところ所蔵する機関が見当たらないように、 当時の霊験譚享受の実態の、 は見られるが、 少なくとも一 新出 この種のもの 右の『西国三十三番 (そもそも標題 の <u>一</u> 枚刷 面 を如 西 「観音霊 実に示 は散逸 玉 は諸 所

した次第である してしまう危険性が高いようにも思われる。 以上のようなわけあって、 この誌面をお借りして紹介させて頂くことに

後掲の図4に全体の縮小写真、 図5と図6に部分写真 (成相寺条、 濃尾地震被害図 奥付) を掲載するとともに、

生人形興行『西国三十三所観音霊験記』の影響(1)

全体の翻刻を付載した。

るのである。 興行と明治十二年興行において採用された霊験譚の相違について周到に検討・整理しているが、 る 年(一八七九)の大阪千日前興行あるいはそれ以降の興行に際してのものである。 で初興行されるが、『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』が拠った冊子体番付は、 三十三所観音霊験記』の冊子体番付に拠っているように思われる。 (『女子大国文』第 右の 「壷坂霊験記」生人形から浄瑠璃、そして歌舞伎・講談・浪花節へ』(ひつじ書房、令2) 『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』の 『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』は、 なお、 一四五号、 明治十二年時の冊子体番付の影印と翻刻は、 平 21 に掲載している。 「観音霊験記」 特に 「観音霊験記」 は、 明治四年興行でなく明治十二年興行の方と一致してい 拙稿 同生人形興行は、 の部分は、 「西国三十三所寺院縁起霊験譚関係諸資料Ⅲ」 松本喜三郎による生人形興行 その時のものではなくて、 細田明宏『近代芸能文化史にお 第二章「生人形」が、 明治四年(一八七一) 両者間で相違する場 明治十二 東京浅草 明治 西国 四年 け

の標題も悉く、 光上人」、第三番 『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』は、各札所の 明治十二年冊子体番付のものと同じになっている。ただ、第十三番の場合、 「渋川佐大夫」、 ·第三十三番 「大倉太郎信満」 「観音霊験記」 と の部分の冒頭に、 主として人名を標題として掲げているが、 第一 番 同冊子体番付が「鹿ノ子 「和泉式部」、第二番 「威

上げている霊験譚も当然同じものであり、そればかりか表現的にも近似する。一例として、 0 0 厳寺条所載の霊験譚を挙げておく(振仮名省略)。共に、「大倉太郎信満」と標題する。 御影/京本願寺七世の上人」と、 「観音霊験記」 が 「京本願寺七世の上人」とだけ記すのが、唯一の相違である。 例外的に二行に亘って掲げるのに対して、『西国三十三番及御詠歌 標題が同じであるのだから、 それぞれの第三十三 音霊 取り

処に伽藍を建立す。 中より出玉ひ、 信満 て信満に与へ玉ふ。 ハ奥州 0 金商人也。 「此処に有縁の地有り」 尊像の連台の下より涌出る油にて常灯明なり。 京都仁和寺に於て供養し、 常々大悲を深く信ず。 ٢, 五里斗行止り玉ふ。 或時、 既に美の垂井迄来りしが、 文殊菩薩童子化して、 即ち今の谷汲なり。 依て谷汲寺と号せしとなん。 御づし重く盤石の 霊木榎の木三而十一 太郎ハ大悲の 如く、 面 闘語の 御心に随ひ 尊像御 像を造り づし

尊像の より出給 大倉ハ奥州 蓮台の下にたゝづみ、 へ、「このところに有縁の池あり」と、五里計り行とゞまり給ふ。 の金商人なり。 京都仁和寺に於て供養し、 常々大悲を深く信じ、 涌出る池にて常灯明となり。 既に美濃たる井迄来りしが、 (生人形『西国三十三所観音霊験記』 或時、 文殊菩薩童子に化して、 故に谷汲。 おづし重く盤石のことく、 即ち今の谷汲なり。 (『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』) 霊木榎木にて尊像を造り信満 明治十二年興行時冊子体番付 太郎ハ大悲を建立 尊像御づし 0 な カン

舌足らずな表現になったもののようである。 及御詠歌観音霊験記』 しようとした結果、 確かに、 なお、『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』の右引末尾の「故に谷汲」は、残りの余白なくて簡略化したために、 表現に至るまで一致あるいは酷似する箇所がほとんどを占めているのであって 文殊の化身が与えた観音像のうえに重ねて信満が「大悲」 0 「観音霊験記」 の部分が、 また、 網掛部「大悲を建立し」は、 右冊子体番付に拠るものであること、一 観音像を造立するという、 冊子体番付の波線部を省略し簡 (実線部)、『西国三十三番 目瞭然とさえ言えそうで 奇妙な展開

を生んでしまっている。二箇所の 池 (傍点部) はそれぞれ、「地」「油」 の誤りに違いない。

験記 ŧ, 1 国三十三番及御詠歌観音霊験記』 を画く絵も、 各霊験譚を記述した下に、 るのかもしれない。 生人形の興行では、各札所寺院の霊験譚の一場面を人形によって再現し、 生人形の冊子体番付と『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』とで共通するし、 の載せる 構図が左右逆転していたり、 「御詠歌 その一 Ŕ **∰** の間でほとんど一致あるいは近似している。さらに、『西国三十三番及御詠歌観 場面の絵を載せている。 子体番付が各札所寺院の霊験譚のあとに掲げる巡礼歌 人物の数に違いがあったりなどはするが、 霊験譚の下に、 同霊験譚の一場面の絵を配するという形式 見世物として興行するが、 明治十二年時の さらに、三十三の 御詠歌」 冊子体番付と に従って記載 霊験譚 冊子体番付は、 \mathcal{O} 音霊 場 园西 面

生人形興行『西国三十三所観音霊験記』の影響(2)

もそうとは言えないようである。 冊子体番付の影響のもと、それに拠って作成されていること、最早疑いないことのように思われる。 西国三十三番及御詠歌観音霊験記』 が、 生人形 『西国三十三所観音霊験記』 の明治十二年大阪千日前興行に しか における

が 観音霊験記』 人形師松本喜三郎作 かって、 て、 右の生人形の興行は、 同年時のものを継承しつつ発行された別の冊子体番付の方に、 同生 興行年譜」 人形興行 浄国寺活人形谷汲観音像 0 は、 制作者の松本喜三郎の死後二十年以上経った大正三年まで各地で行われ続けた。例えば 冊子体番付に拠ってい 明治十二年以降同二十六年までの間に、 修理報告書』 るのだとしても、 (曹洞宗浄国寺、 明治十二年時の 拠っている可能性が考えられるのである。 計八回の興行があったことを示している。 平 20 ものでなく、 所載伊藤加奈子編 それより後の興行に 『西国三十三所 した 『活

1

悲ふかく、 は言えず、後年のものに拠っているのかもしれないし、また、複数の時点のものを合わせ参照してい 明治十二年版でなく明治十四年版の方と悉く合致しているのである。 と一致している。ところが一方で、第二十九番松尾寺条の場合、同一の霊験譚ではありながら、「常に大悲を信じて慈 国文』第一 いる。 治十二年時のものとほとんど同文であるものの、「榎の木『而」「御づし重く」(明治十二年版)「榎ノ木を以て」「御 し重く成て」(明治十四年版)と小異が見られるが、『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』は明治十二年版と一致して (明治十四年版) 試 あるいは、そうした冊子体番付に基づく何か別の文献などに拠っている可能性も考えられようか。 みに明治 拙稿 四三号、 「近代池坊いけばな縁起追考― 十四年時の冊子体番付 と、 平20)にて取り上げた、第十八番六角堂条に見られる小異についても、 両版で表現も内容もかなり大きく異なっているのだが、『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』 (細田明宏氏御提供写真に拠る) -生人形『西国三十三所観音霊験記』六角堂条をめぐって――」(『女子大 専ら明治十二年時の冊子体番付に拠ってい と見比べるに、 右に挙げた華厳寺条の場合、 それは明治十二年版の方 るのかもし 、ると は、 明 づ

尊の御影を加えたものだとも捉えられるだろうか。 されたが、『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』 たところだが、右の ただ、いずれにせよ、生人形『西国三十三所観音霊験記』の冊子体番付に直接または間接に依拠していることに違 注意されるべき面があろう。 同生人形興行の影響については、 『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』は、 同生人形興行では、 先掲細田著書第七章にて論じられ、 は、 その冊子体番付を一枚刷番付の如く一枚物にし、 冊子体番付とともに、 従来知られていなかった、 右掲中 絵を中心とした一 前拙論にても若干検討 同生人形の明らかな影響作 枚刷 それに各札 番付も

かしながら、 また一方で、生人形の冊子体番付に拠ったのでは絶対にない記述も一 箇所、 『西国三十三番及御 詠歌

国三十三番及御詠歌観音霊験記』が濃尾地震被害者の冥福などを祈る総出開帳に伴うものであっただけに、自然災害 間には、生人形興行が開催された形跡はなく、その間の興行に際しての冊子体番付に拠ったものではあり得ない。『西 その「明治二十六年二月十二日」から『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』の刊行日である同年三月二十三日までの 『古本説話集』巻下第53話以来知られた霊験譚を掲載しているが、その中に「ある年大雪降り、殆ど明治二十六年二月 観音霊験記』の に対する意識を強く持っていて、その結果、 十二日大雪の如く、百年以降になき大雪のため」と、傍点を付して、近時の大雪に言及しているのが、それである。 「観音霊験記」の部分に見られる。第二十八番成相寺条(図5)には、『今昔物語集』巻十六第4話や 右のような記述が殊更加えられたのであろうか。

【翻刻『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』】

- 基本的に通行の字体に改めるとともに、句読点や引用符を適宜加えた。
- 不明箇所は、□で示した。

第一壹番 紀州牟婁郡青巌渡寺 那知山 本尊如意輪観世音

ふたらくやきしうつなみはみくまのゝなちのおやまにひゞくたきつせ

和泉式部

○はれやらぬ身のうき雲のたなびきて月のさはりとなるそかなしき ハ歌道に志深く、 那知山観音に祈りて、遂に百人一首の内に撰れしなり。 度々那知山さんけい Ļ ふと月の障りて、

と詠したる。其夜、権現の御返哥に、

○もとよりもちりましはる神なれは月の障りはなにか苦るしき

とよませ給ふ故、心よく参詣をとけしと。 和歌文学始め達人となりしハ、 大悲の利益なり。

第二番 紀州名草郡 紀三井寺 本尊等身十一面観音

ふる里をはる/〜こゝにきみゐでら花のみやこもちかくなるらん

威光上人

開基にして、唐土し渡来したるれいぶつ、大般若経を写し給ふ時、美人参詣に来り、上人、「何方の者なるや」と問け 中を西方へ飛行せり。此より毎年七月七日に灯籠を献する也 横道の桜等、五品を献じて、「妾ハ篭女なり。上人の尊き法を聴聞し、その功徳にて成仏得脱せり」。拝れいして、空 るに、れい拝して清浄水の瀧つぼの中に隠れしか、三年を経て美女又来り、微妙の法螺貝、 如意、 香爐、 加葉の錫杖、

弗三番 紀州那賀郡 粉河寺 本尊等身千手千眼観音

ちゝはゝのめぐみもふかき粉川てらほとけのちかひたのもしのみや

渋川佐大夫

童子ハ仏におわせしや」と知、 たづぬれど知れず。庵にいこへしに、仏間 苦痛をのかれ、 河内の人にて、 一子大病にて、百事手を尽せとも功なく、夫婦心を痛め、 夫婦は大悦ひて謝礼すれども、一文もうけず娘の箸紙をとりて、「粉河の者なり」とて去る。 遂ひに世にこの名も高く、渋川村の冨女の建立施主なるはかくれなき事也 |光明かゝやきて、千手観音の御手に子の箸紙かゝり居て、「偖てハ彼の 折から童子来り、千手陀羅尼を教へけるに、 快癒の後

第四番 和泉国和泉郡 槇尾寺 本尊等身千手観音

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

みやまぢやひばら松ばらわけゆけはまきのおてらにこまぞいさめる

光明皇后

智海上人とて行法堅固の御方にて、ある時、麐来りて上人の尿をなめて孕み、女子を産り。見捨がたく、ザカネター ギャウホウケンゴ 御告これなるべし」と尊んでつれゆき帝に奉りて、 に信仰深く、実に観音の応化也ト知。 しに、七才の時、 田を植付居しに、藤原の不比御寺に参詣のおり此女をみるに、身体より光明をはなち、「扨 聖武帝御寵愛深かりしと。ゆへに光明皇后となづけ給ふ。 村人養育せ ハ観音の 殊ニ仏

第五番 河内国丹南郡 藤井寺 本尊千手千眼観音

まいるよりたのみをかくるふしゐてらはなのうてなにむらさきのくも

藤井安基

その鹿を煮て食し、俄かに死して地獄に陥り、ゑんまの前にて大罪苦患うけある処へ、童子現れて、「かれハ我長谷 なりて、この本尊をつくり、こゝに安置し故に、藤井寺と云なり。 寺の再興の材木をひきし善根あるゆへ、速かに沙婆にかへし給へ」とありけれ。蘇生しために改心し、行基の弟子と 大和人で放らつ邪けんのものありて、白石山にて鹿をとり、堂に入て経机を爼板とな仏具をとり出してうつわとなし、

롸八番 大和国高市郡 壺 阪 寺 本尊千手千眼観音

いはをたて水をたゝへてつぼさかのにはのいさこもしやうなるらん

瞽者沢一

垣武天皇御眼病の時、 しに、更に御利益なきゆへ、本尊をうらみ帰らんとする。折しも後より微妙の声にて「沢一」と呼かけられ、 観音の功徳にて御癒 あらせられしによりて、 御建立なりし。 沢一といふ盲者、 千日 間 はつと

振向きたるに、ふしぎや目ハあきらかに、 御堂かゝやき官女のお姿にて現れ給ふに、 驚き深く拝し、 其夜の夢に未だ

第七番 大和国高市郡 岡寺 本尊二臂如意輪観音

宿業つきずとの御告より、

妻子諸共三十三所巡拝せり。

けさ見ればつゆおかでらの庭のこけさなからるりのひかりなりけり

長門の少女

かたき也。 に、帆柱にとりつき、又、送りたる漁夫ハふしぎなる告ありて、浦に出て助け誘ひ来たりて玉はりしなり。 せしに、 青野の里某の女、西国順礼を志しに、家を出て多くの諸人と舩にのり合、海上にて難風に舩をくだかれ、残らず溺死 此娘のみ浦きしに上り家に送られしかバ、両親よろこび次第聞くに、 岡寺の 御詠哥を心にうかびし故念せし 実にあり

第八番 大和国城上郡 長谷寺 本尊等身十一面観世音

いくたびもまいるこゝろははつせ寺山もちかひもふかきたにかは

道徳上人

たふ。上人、諸人に見せ、後、 三十三所あり。 王の御答ひに、「彼の毒木を以て大悲のの像を刻み、諸人に拝ませバ、変して薬となる。 昔大和洪水の時、毒木流れ来リ、近よる者命を失ふ。上人是をなげき、ムカシトマートノ ホ ミ゙ズ トギ トクボクナガ キタ 是に巡礼すれバ地獄へ来る事なし」と仰。 中山寺隠居し什物トス。 故に、末世衆生か疑ひを起さぬ証を、大王直筆に血判しあ **脳摩の御前に至り其事を御尋ねありしに、大** 又、日本の 国 観音の霊場

第九番 南都興福寺 南 円 堂 本尊不空羂索三目八臂

はるの日はなんゑんとふにかゞやきてみかさの山にはるゝうすくも

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

春 日 明 神

運び給ふ。 御父右大臣、 日雇賃銭を一文も給はず。成就の後ち一首の哥を詠じて、 藤氏の子孫盛を弘法大師に御尋ありしかバ、不空羂索の像を進ず。此御堂建立の時、人夫に交て土木を 此時明神と知れたり。

○祁陀落の南の岸にどう建ていまで栄へんきたのふじなみしょぎ

と詠じられてきへ給へり。「此寺と藤原家をなかくまもるべし」と給ふなりと。

山城国宇治郡 三一室三尸寺 本尊二臂千手観世音

よもすから月をみむろとわけ行ば宇治の川せにたつはしらなみ

待田村農女

りて経文一心に読けるゆへ、をそれちかずくあたはず。暫時する間に、大な蟹沢山来りて、蛇の体を挟切て恩を報ぜ れに「わか娘をやる」とゆふ一言をきゝはけ、すぐはなしけるに、その夜、美男児なりて入来るに驚き、 りしと。又、此父田よりかいり道に、蛇がかいるを吞まんとするを、助けんとすれとなかく、放さず。おやじたはむ 此娘ハ常仏道を尊び、殊に観音をふかくしんじ、ある日、 しと。此家寺 |。 村人蟹を殺さんとするに、此女銭を出して買取りはなちや 娘 間居

第十一番 山城国宇治郡 醍 醐 寺 本尊準提観世音

ぎやくゑんももらさですくふくわんなれはじゆんれいどうはたのもしきかな

僧正ハ智徳勝し名僧にして、役の行者熊野へ出る峯入を始め給ふ、その折しも大蛇出て峯入しかたく、 勇力放、 大鉞を以て大蛇をたいじ、二度の峯入を開き給ふ。その大蛇の毒に当りて苦痛たへがたく、準胝陀羅尼を誦 僧正 無双の

せしに、たちまち平愈し、此時異僧現れ、「汝観音の像を彫み一寺を建立せよ」。霊木をあたいて消へ給ふなりし。 して一心に念ず。其夜の夢に観音現れ、「宇治の笠取山に霊水有。 早く行て浴せよ」と告給ふ。 僧正直ちに行てゆあみ

第十二番 近江国志賀郡 岩間寺 本尊千手千眼観世音

みなかみはいつこなるらんいは間でらきしうつなみかまつかぜのおと

芭蕉翁

名、これによりてあり。 者に菓子与へ速かに成就し、遂ひに大悲の霊験により一天に名をかゞやせし事、 住庵と号け、 ばせを翁ハ、天下に俳家の名声を轟かしたき心願より、常に岩間寺にこもりて祈誓し、国分山に閑居し、此庵りを幻 三年間住ひ居。 九十日間法華経二十八巻を小石に一字づゝ書、この里の子供にこの石を拾はせ、 偏に仏御聖徳の賜のなり。 幻住庵の 持来る

まづ頼む椎の木もあり夏木立

第十三番 近江国滋賀郡 石山寺 本尊二臂如意輪観音

のちの世をねかふこゝろはかろくとも仏のちかひおもきいしやま

京本願寺七世の上人

御申あり。 石山寺に参詣ありし時、そのほとり召抱へし女、寵愛ありて若君誕生あり。布袋丸といふ。 六才の時、 鹿の子振袖をきせ、そのすかたを絵に写し、一首のうたをのこし、石山寺かへらせ給ふ。 御母御常々一字再興の旨

○恋しくバ尋来て見よ唐橋の石たつ山は母のふるさと

布袋丸ハ蓮如 かへり給ふ。 石山寺ハ是迄御留守七年目にかへり、 鹿の子の御影と御書れたる六字の名号と仏の御手に持被

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

第十四番 近江国滋賀郡 三井寺 本尊如意輪観音

いてゐるやなみまの月は三井寺のかねのひゞきにあくるみづうみ

大津町下女杉ハ

をあらたむるに、懐中より如意輪観音の像出給ふ。家内一日、 逆さまに石うすの上に落、上に数多の薪おち、骨身も碎ける有様なるに、何のけがもなきゆへ、余りふしぎさ、身体 事なけれとも、 三井寺へさんけいし、朋輩ハみな笑ひしか、少しも心にとめず。そのころ世けんにおこり病流行し、一人ものかるゝ 此女のみ斗り何事もなく、 ある時、二階に積あげたる薪を取んとはしごかけ上りしに、 扨ハ大悲の御助と知れタリ。 梯子をれ、

第十五番 山城国落東泉山 今 熊 野 本尊等身十一面観音

むかしよりたつともしらぬいまくまのほとけのちかひあらたなりけり

楠正成

扨ハ観音の加護我を助け給ふかと、涙だなから信一層し給ふと。 るにきすもなく、 咎め、吉崎勘解由左エ門射殺んと放ち、その矢、正成か右の肘に当りしかども、毫も痛む事なく落延て、 当寺の観音を深く信じ、日毎に普門品を怠す読。 正成竒異の思ひをなし、 懐中せし観音経開き見るに、ふしぎや、一心称名の御文の処に矢疵甚しく 赤阪落城の時、 百姓の婆に身をやつし落行所を、 敵陣 右の腕を見 の中より見

另十二八番 山城国落東音羽山 清水 寺 本尊等身楊柳観音

松風や音羽のたきのきよ水をむすふこゝろのすゝしかるらん

熊野御前

ハ常に清水寺の観音を信じ、 世に名高き美人原、 宗盛卿御寵愛厚く、 昼夜そばをはなさず。熊のハ母の大病なれとも、

ひ一首の哥を詠じけるに、宗もり聞しめし、其場て御暇被下れと也 来りし。 宗盛卿より御いとまを被下ず。心ならずも日ををくりしが、清水の花見をもよふし給ふに、 君に文をさゝげて姉のいとまを乞ふと雖も聞入なく、花見の御ともにつれ行きしに、姉は一心に大悲をねが 妹朝良母の使となりて

第十七番 山城国落東普陀落山 六波羅密寺 本尊等身十一面観音

おもくともいつゝのつみはよもあらしろくはら堂へまいる身なれば

空也上人

かりしなり。仏の茶湯を元朝に服し給へり。故に王服の言始り。 まちになほりけるに、衆人大悲の妙知力を尊み、遂に当寺建立したり。 天暦五年の春、京都市中至る所悪疫流行の為に、人死往来にたをれ、 しのびずして、空也上人自から尊像を彫み祈りて車に乗せ、町を曳渡りて信心を進めしに、一度曳渡りたる町ハたち 家にかなしみ、数万人々悲しみなげき、 後、村上天皇御きこし召て、大ゐに御信仰深 見るに

第十八番 山城国洛中 六角堂 本尊六臂如意観音

我かおもふこゝろのうちはむつのかどたゝまろかれといのるなりけり

池の坊

となりて、立花活花の法を教へ給ふ。これ即、 当本尊ハ、聖徳太子霊木の大杉一本を以て、六角堂を建て給ふ。壱人臣を堂守となし、 千場未生草堂及遠州流胚と区々に別れしも、 大原ハ六角堂池の坊と、大ゐに世高かりしなり。 日本立花いけ花の本原なり。 観音大悲の御伝授にて、 是れ即ち池の坊なり。本尊児 大悲の霊けん、 元祖池の坊より 尊とか

第十九番 山城国洛中 革堂 本尊等身千手千眼仏

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

はなを見ていまはのそみもかう堂のにはのちくさもさかりなりけり

東山大工某

路に出ると、山賊あらわれいでゝべんと衣類迄はきとられ、をはにこのよしをはなしけれは、大ゐに奴り、おはのし路に出ると、山賊あらわれいでゝべんと衣類迄はきとられ、をはにこのよしをはなしけれは、大ゐに気で たくしたるに、そのつま密夫ありて、本夫のべんとふにどくをしこみてころさんとたくみしに、ゆめにもしらず丹波 ん類をいかけ行くに、死し居たり。 つねにかんをんしんじ、 朝夕にさんけいいたしけるに、 丹後笹山にをばありて大病のよし申し来りしゆへ、いそぎし

第二十番 善峰寺

山城国洛西小塩山 本尊等身千手千眼観世音

野をもすき山路にむかふあめのそらよしみねよりもはるゝ夕たち

山源 算上人

建立あり。上人ハ百七才の寿を保ち、実に越前の仏知法印とひとしかり。 んをしんじ、是に依て山の神雇夫となし、然るに猿鹿来りて岩石を平地となし、 村人拾ひあげ、十六才の時叡山にのぼりて、後、源算と号し、母の亡を聞。 上人ハ母の胎内にあるに、母をくるしめし不祥子なりとて、山に捨てられ、 阿知坂の神守護し給ふ故、 当山に来り練行つくしかたく、 此事天皇にきこめされて、 鳥獣も害せず、 仏閣を御 只かんお

第二十一番 丹波国桑田郡菩提山 六穂寺 本尊等身聖観世音

かゝる世にむまれあふ身のあなをやとおもはでたのめとこゑひとこゑ

辰女

目 亀山金屋の下婢にて、 亭主、 たつ女の居間を見まわりしに、光明かゞやきしゆへ、たつ女に事を尋るに、 つね ぐ、観音をふかくしんじける。 そのころやく病流行のをりからにて、 昨夜ふかにまくらべに貴僧あ 家内中伝染し、

寺の者なり」と御答ありしまず、病苦ともにゆめの如くきへ給ふ。大悲の御恵みこそありかたき也 らワれ来、 柳の枝にて甘露の如く水を吾口中へたまはり、心能き事更なり。 「何れの御方なるや」と尋申せバ、

第二十二番 摄津国嶋下郡普陀洛山 摠持寺 本尊千手千眼観世音

おしなへてたかきいやしきそうじしのほとけのちかひたのまぬはなし

山蔭中納言

ろこしより栴檀香をとりよせ、大悲変化の童子に彫刻なさしめ、 なちにがせし大亀、御子を甲にのせたすけ奉りしに、高房卿観音霊けんその貴をしり、志願をその御子についで、も うばおん子をあやまちて海中にをとしけるに、父高房卿いたくかなしみ給ふ。長谷の観音を祈りしに、ふしぎにもは 高房卿ハ六才御子をつれ西国下向の道すがら、大亀を殺さんとする見て、亀をかいとりにがしたまへし。その後ち、 霊験殊に大ゐなり。 信に然り。

第廿三番 摂州島下郡応頂山 勝尾寺 本尊千手千眼観世音

おもくともつみにいのりのかちを寺ほとけをたのむ身こそやすけれ

百済王后

かいとして、あかぬいい金鼓金鐘等を日本勝尾寺にさゝげる。 不思儀や、一夜のうちに雪の如き頭るりの如くなりしかバ、国王悦びのあまり、 に験なかりしか、日本播州勝尾寺の観音ハ霊験あらたなるよし夢に見給ふ。直ち日本の方に向ひ一心に祈誓し給へバ、 此きさきハ有名なる美人にて、国王大ゐに愛し玉ひしが、何なる故に盛りの齢にて白髪となり、種々手を尽せとも更 今にこの寺の重物と也したはん。 即ち日、周文徳・揚仁館の一人をつ

第廿四番 摄津国河辺郡紫雲 中山寺 本尊等身二臂十二面観音

野をもすぎさとをもこえてなか山のてらへまいるはのちの世のため

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

多田蔵人の室

多田幸氏ハ常々観音を信仰し、其奥方ハ信心をきらい、幸氏常になけき給ひ、ある年の三月、花見に事よせて中山タ ヾユキウジ ツネく それ信心をな。夫婦二世安楽の身となり給ふ。 を失ひけるゆへ、皆く、あはて寺僧をたのみ、仏罪をわびける。 つれ行しに、 奥方いやく~本堂に至り拝をなし、帰らんとせしに、 霊験如此也 紐とけ帰宅なし後、やふやく人心となり、弥く~お 鰐口のひも頭にまきつき、 梁まで釣り上り、

第廿五番 播磨国加東郡御嶽 新清水 本尊千手千眼観音

あはれみやあまねきよとのしなく~になにをかなみのこゝにきよみつ

倍夫太郎

のために一宇をたてて犬寺と号し、兼て信仰の大士の霊験なり。 に殺んとせしを、犬、彼の家来の弓づるを喰切り、 にすゝめだし、しん山てころさんとたくみしは、 鎌足公入鹿を誅伐の時、 御ともにまいりし留守中に、妻は家来大蔵とまをとこなし、太郎帰国の後、 ゆめにもしらず、白龍・黒龍の犬を引て山に入しに、 たゞちに家臣の首を喰とり、 後妻をも喰殺し。 太郎、 彼の家来一矢 その後、 ある日鹿狩

第廿六番 播州加西郡法華山 法華山 本尊等身二臂千手千眼

春ははな夏は立花あきはきくいつもたえせぬのりのはなやま

法道仙人

起へ、然るに上人鉄鉢をとばして供米乞を、 開基上人ハ天竺より渡り、法花山にて | ||鉢と云器を飛して供養を受。 藤井驚き舩より上り山に平伏してわびると、再び空中より米こと~~く舩に戻り、其をり途中にて落たり。 藤井鉢を足にかけ、 鉢ハ空中に走るに随ひ、 ある日ニ、藤井某し禁中へ貢米を積、 千石の米皆つゞい 播州灘を てとぶ行

地を米田村とゆふ。

第廿七番 播州西加郡 書写山 本尊如意綸観音

はる〳〵とのほれはしよしや山おろしまつのひゝきもみのりなるなん

性空上人

当時開基天台智徳の名僧性空ハ、法花三昧を修し給ふ時、空中に音楽聞へ異香薫じ、天人天降り、底前の桜木を礼拝(マトン) し」と知らせ、空中にかへりしと。聖人一宇をこんりうし、大悲を安ちし給ふ。これ、書写山の開基なり。 す。上人怪しみ、そのゆへを尋ね給ふハ、「天下末世衆生済度のため、彼の木を以て観音の像を彫み、衆生をすくうべ

第二十八番 丹後国与謝郡 成相寺 本尊聖観世音

なみの音まつのひゝきもなり相にかせふきわたるあまのはし立る。

斎遠禅師

りとて煮て食し、雪晴るるに里人等食物持来り、彼の語りを聞て鍋をみるに、不思議や木くずあり。 御足切りあり。是、仏の教ひ給へし知る。 涙 なから彼の木屑を当るに、元の如くなり。故に成相寺。 き大雪のため、人の往来絶てなく、食物なく将に餓て死に臻らんとする処ろ、狼み鹿の足を持来り、僧ハ三浄の肉な。 斎遠ハ深く観音を信じ、然るに貧にして、ある年大雪降り、殆ど明治二十六年二月十二日大雪の如く、百年以降になサネーニラン 本尊を拝するに、

第二十九番 丹後鴻の浦 松尾寺 本尊馬頭観世音

往昔はいく世へぬらんたよりをばちとせをこゝにまつの尾の寺

結城宗太夫

常々馬頭観音を信じ、 毎日参詣せしか、或夜浦人と漁船にて俄に悪風に逢ひ、乗合人々海魚餌となり、 独り宗太夫ハ

松より感得の事ハ御詠歌に有。 り。いよく、ありかたきを感じ、 ラセツ国に漂流し。一心に観音を祈るに、ふしぎやゆめのごとく白馬あらわれ、宗太夫をのせて 海 駆け古郷をくられ しに、つま子のよろこび泣はかりなり。白馬ハきへ失せたり。よく日当山観音に参詣し奉るに、白馬の手綱持ち給 当山の弟子となりて光心となづけ、 生かい当山につかへりと也。 開山威老上人千年

第三十番 近江国浅井郡 竹生島 本尊千手千眼観世音

月ともになみ間にうかふ竹生島舩たからをつむこゝちせり

仲算上人の児

此ちごハ観音化身、住僧仲算上人の使ひ給ふ。この児、凡人なららざる事をしられて寵愛なされしに、ふと行衛しれ 上人尊み、今に宝物なし、即ち観音の応化なる示せりとなん。 対面あり。琵琶をかされたりしに、よく年十二月十八日空中に音かく聞へたりしに、舩中に落たる者、此びわなり。 ざりしに、或時下男山へ行しに、此ちご木梢に坐して法花経を誦す。此事を上人へ告しが、たゞちにその処にいたり、

第三十一番 近江国蒲生郡 長命寺 本尊等身聖観世音

八千とせや柳にながきいのちてらはこぶあゆみのかさしならん

佐原藤十郎

常に肌身につけ長命寺の守仏、 中へに打こまれしに、夜中浪間に光明のかゞやきしゆへ、漁夫あやしみあみを打しに、かゝりしものハ彼の藤十郎で、 藤十郎ハ越前の者にて、深く観音を信仰し、 堅田村に堂舎をたて、生涯仏につかへりと。 光明を放ち給ふ故よみかへり命たすかり、仏のありかたきたえず。 両親を失ひ後、 京都に行を道、 志賀の里にて賊に逢、 此の寺のでしとな 金品はぎとられ水

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形

近江国神崎郡 観音寺 本尊千手千眼観世音

あなとうとみちひきたまへ観音寺とほきくによりはこぶあゆみを

人魚

聖徳太子此石寺村を通り給ふ時、芦原の中より、頭ハ人にして全身魚のかたちなるもの這上り、「私ハ元この浦の殺生ショトトクタイトシ 魚浮みいで、まのあたり天上界へ生を更しとゞ。 を安置し給ひ、われをたすけ給の」と願ければ、太子自ら千手観音の像を彫み、大伽藍を建立し、入仏供養のとき人 をこのみしつみ重なり、かよふのあさましきすかたとなりて生れ来り。 大慈をたれさせ玉ひ、一宇の堂舎に大悲の像

第三十三番 美濃国大野郡 今まではおやとたのみしおひつるをぬぎておさむるみのゝ谷ぐみ 谷 汲 寺 本尊等身十一面観音

大倉太郎信満

台の下にたゝづみ、涌出る池にて常灯明となり。故に谷汲。 へ、「このところに有縁の池あり」と、五里計り行とゞまり給ふ。即ち今の谷汲なり。太郎ハ大悲を建立し、 給ふ。京都仁和寺に於て供養し、既に美濃たる井迄来りしが、おづし重く盤石のことく、尊像御づしのなかより出給 ハ奥州の金商人なり。常々大悲を深く信じ、或時、文殊菩薩童子に化して、霊木榎木にて尊像を造り信満に与へオーシウ 尊像 の蓮

袋表面(揖斐川町立谷汲図書館所蔵)図1 『西国三十三所観世音聯合開扉記念おみやげ』

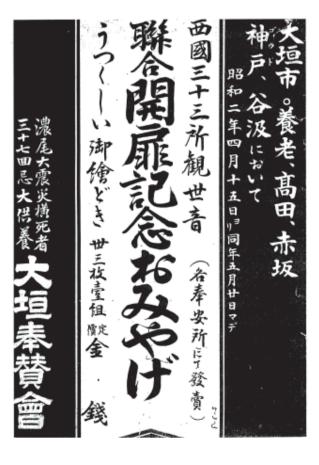


図2 『同上』・第廿一番菩提山穴太寺



図3 昭和二年西国札所総出開帳案内地図(岐阜県図書館所蔵)

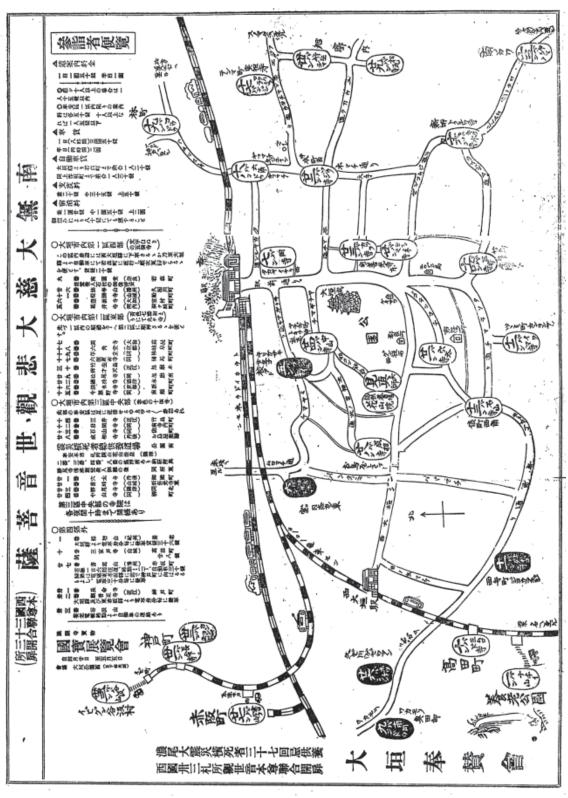


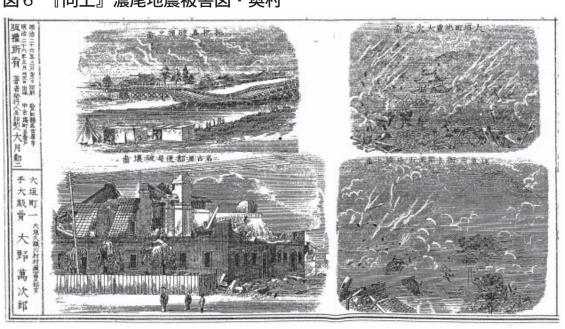
図4 『西国三十三番及御詠歌観音霊験記』(稿者架蔵)





(本学教授)

図6 『同上』濃尾地震被害図・奥村



齋達、深く観音を信い
齊速 禅師

然るよりない

ある年大雪降り殆ど明治二十六年一月十二

なっら彼の木屑を当さる元の如くなり故る成相寺

ANTO ALLEANAN